

## 私が日本留学で学んできたこと——特に女性のすごさについて——

チャクル・ムラット  
筑波大学大学院

2006年に運よく日本留学の夢がかない、今年で9年目になった。振り返ってみればあっという間に過ぎた時間であるが、日本留学をきっかけに「良き市民」になる学びのプロセスが始まったと思う。日本に来た当時と今とを比べると、想像以上の成果があり、学んだことははかり知れない。専門的な知識や研究でのノウハウはそのひとつである。たとえば、問題意識をはっきりさせること、適切な課題や方法を設定すること、そして、研究者だけが理解するような研究では意味がないから、子どもにも分かるように研究のデザインを常に映画監督のごとく考えていくことなど、ここに書ききれないほどの学びがあった。

この9年間は、研究だけをやってきたわけではない。日本人や様々な国の人々との交流のおかげで、研究以上の学びがあった。研究だけの人生というのはつまらないと思ったことも多々あるから、その時にはできるだけ日本人の研究者と交流した。また研究者だけの人間関係では狭いから、子どもや一般の人とも接したいと思うようにもなった。

特に、小中学校でのトルコの紹介といった形での国際交流活動をとおして児童や生徒から学んだことは、私の人生観や世界観を変えるほど刺激的なものだった。子どもたち（子どもといってもみんな立派な「大人」たちだと思うが）に思い知らされたことは主に2つある。ひとつは、私が自分のことや自国のことをいかに知らないのかということだった。もうひとつは、教えること、つまり、子どもたちの成長・学びを最大限に助けて導くことがどれだけ難しいことなのかをよく理解したことである。

研究について苦しんでいるときに、子どもに関係する活動を行い、そこで得ている学びを自分で実感できるようになり、研究上の新たな気付きや達成感を味わった。だが、当時焦りや心配がいっぱいあった昔の私に、今の自分は、「まだまだ伸びしろがあるよ、先のことを考え過ぎたり、小さいことで悩んだりするよりもっと行動しなさい。その時にやるべきことをやりなさい」と言いたい。なかなか物事がうまくいかず達成感を味わうことができなくても、「それはそれでまた学びだよ」と言いたい。

こうした考えを強めたのは、自分の子どもが生まれた時と、その時から実感し始めた「女性のすごさ」のおかげである。

自分の育ってきた社会において女性の社会的地位や女性に対する考え方というものに、いつも問題を感じて、どうやってもっと女性が生き生きする社会にしていくかということを考えていたりしていた。しかし、今考えてみると、当時は本当の意味で「女性のすごさ」を理解していなかったとはっきりいえる。トルコ社会でも経済的な自由を手に入れている女性たちは生き生きして、積極的で活発に動く人が多い。しかし、日本の女性と比べると、大きく違うところは「日本人女性のしたたかさ」である。

出産前の変化と、出産後の子育ての長い過程が始まってからの妻の変化ということに対する自分の発見・驚きと戸惑いを忘れることができない。まず、女性が「子どもを産む」ということ自体がすご過ぎる。男性は女性より体力があるにしても、出産の痛みなどには絶対に耐えられない、精神的に男性は弱い生き物だと思う。また、子育てをし始めてからのたくましさ・したたかさが出産前より何十倍も強くなっている妻の姿を見たときに、一方で、子どもが産まれてもあまり変わらない、また変わろうとしているが、なかなか思うように変えられない自分がそこにいて、今まで感じたことがない無力感に襲われた。その後、妻のペースにどんどん巻き込まれていくのだが、自分は何とかしてついていかなきゃいけないと思い、いろいろ学び始めた。このように女性が秘めている底なしのしたたかさと、守り・包み込むような優しさを身近で見て感じ、そこから自分は初めて女性を本当の意味で理解し始めた気がした。

一方、晴れて渥美財団のメンバーになれて、違う側面から女性のすごさを発見することができた。それは、男性と違う女性にしかできないリーダーシップである。男性のリーダーシップはどちらかというと、持っている権力を通して人々が動くように働きかけ、影響を与えることが中心になっているといえる。しかし女性は、影響力を与えるというより、まずその組織の一員としての居場所を与え、一人ぼっちと感ぜないように大きな家族のあたたかさで包み込む。そこから大きなネットワークに「ダイナミックにつないで」個々人にアイデンティティを与える。そうすると、抵抗感を感じないでいつの間にか自分から女性のリーダーシップに引っ張られている？ことに気付く。このような学びを経て、自分ももしリーダーの立場に立った時にどうすればいいのか、相手をどのようにつなぐか、その相互関係性を理解したといえよう。

よく考えてみると、この世の中はそもそも女性が作っているといっても過言ではない。我々男性が仕事や研究という狭いところでちまちましているよりは、もっと多様な能力を持っている女性に学んで、世の中をよくしていかなければならない。私はどれだけ狭い思考の世界でしか考えていないのかを思い知らされて、それをもっと広くしなければならぬと感じた。

これらは私のこれまでの留学経験で取得した貴重な経験であるが、良き市民になるための自分の人生の新たな段階での新たな学びは始まったばかりなのだ、と私は思う。